

「農業と科学」500号記念発行にあたって

J A 全農

肥料農業部長 岡 本 英 誠

1. はじめに

昨年10月をもって「農業と科学」の発行が500号になり、まずもってお祝い申し上げます。30年の長きにわたり継続してその時代にあった記事を掲載し、配布し続けたことに対し、改めて敬服いたします。また、チッソ旭肥料（株）が求める肥料新技術の水準の高さとその普及に対する情熱の深さをまざまざと感じ入っております。

2. 肥料の開発と背景

500号までの期間、農業をめぐる環境の変化には著しいものがあります。第1号が出版された昭和30年代は戦後の復興期の真っ只中で、農業も食糧増産にむけてさまざまな技術革新がなされていたころです。水稻では機械化農業が始まり、技術革新と相まって増収が図られたころであり、さらに野菜や果樹、花などの栽培面積も増えはじめ、肥料の持つ作物生産への役割がこれまで以上に高められた時期でもあります。

その後肥料の技術革新は、40年代に入り化学合成による緩効性肥料や被覆肥料の開発、田植機とのセットによる局所施肥技術の開発、さらには野菜等での液肥などの普及を経て今日にいたっているものと考えます。米を中心にした食糧増産の時代から、野菜、果樹等の振興、さらには機械化を中心にした省力、低コスト化の時代へと変わり、まさに貴社の果たしてきた役割は大きく、本誌もその歴史を追ってきたものといえます。

この間、貴社はリン安系の高度化成はもとより、さまざまな機能性の高い肥料や資材の開発努力を続けていることは周知のことです。例をあげると枚挙に暇がありませんが、その技術力は常にわが国の先端を走っていると確信しております。貴社の主要な実績を具体的品目とその成果をあげるとすると以下のとおりです。

- ①硝酸系高度化成肥料：独特の石膏ろ過法により硝酸性窒素リッチの化成肥料を製造し、野菜、果樹などの園芸作物の生産に貢献。
- ②育苗用床土（与作シリーズ）：ピートモスを主体とした野菜、花の育苗用培地を開発し、安定、良質な苗生産に貢献。
- ③CDU入り化成肥料（タマゴ化成シリーズ）：化学合成による緩効性窒素肥料（CDU）を開発し、化成肥料として追肥の省略や濃度障害の回避に貢献。
- ④被覆肥料（LPシリーズ、ロングシリーズ）：尿素や磷硝安加里などの速効性肥料に樹脂を被膜したもの。肥料分の溶出を長期間にわたってコントロールでき、基肥全量による施肥体系などの省力・低コスト化を可能とした。
- ⑤あさひポーラス：軽く、容易に水に溶けるため、液肥や流し込み施肥用など省力的施肥に貢献。

3. わが国農業と肥料の役割

さて、翻ってわが国の置かれている農業の状況と今後のあり方について一言述べさせていた

だきます。いま経済全体が景気低迷する中、農業が置かれている環境も厳しくなっております。米の増産から減反、さらには農産物全体の輸入外圧が加わり、まさにわが国の農業全体が曲がり角にきているともいえます。WTOにみられるようにあらゆる商品のボーダーレス化が進み、農産物も例外ではありません。土地集約型であるわが国農業が欧米なみの低コスト化を実現することは難しいといわざるを得ません。しかし、同時に食糧問題も並行して進行しており、発展途上国を中心に世界のどこかで食糧不足や飢餓問題が常に起こっているのも事実です。国の基本物資である食糧生産の自給率向上は、将来予想される食糧問題への対応としても考えていく必要があります。

また、利便性への偏重は環境負荷を与えることがあり、農業生産上においてもその軽減のための持続的農業など環境に配慮することが求められています。全農も「生産資材費用低減運動」を展開し肥料の低コスト化を追求すると同時に、技術面では「健康な土づくりと施肥改善運動」を展開し、作物生産に最適な土壌条件の整備と環境にもやさしい肥料、施肥技術の開発、普及に取り組んでおります。肥料は食糧増産という課題には農産物の生産力を向上させる上で欠かせない生産資材であります。新農業基本法では食糧増産による自給率向上がうたわれていますが、いかに生産性を向上させるかが大きな課題ともなります。この意味からも低コストにつながり、かつ付加価値のある肥料を供給することは全農における重要な任務であるともいえます。

最後に貴社におかれましては、今後とも農業の発展のため系統とともに肥料、施肥技術の向上への協力、貢献をお願いするものです。